学生の文章表現 (一)

――誤字の問題点――

小高　恭

一、はじめに

若い人達の日本語の文章表現、文字力等に多くの問題がある、という事が言われ出してから既に久しい。様々な意見が出されていようから、今更私が事新しく言い立てる迄もない事かも知れぬ。殊に、私は漢字研究の専門家でもないし、年上の方に伍するだけの文章力を身につけているものでもない。それどころか、時々自分でもとんでもない誤字を書く事に気づく有様であるから。しかし、国文学を専門とし、本学経営学部・工学部で「文学」の講義をし、経営学部の「文章指導」を担当する身としては、学生の現状を一度私なりに整理しておく必要はあると考える。

少し前になるが、「言語生活」昭和50年10月号が「現代の誤字」について特集した時の対談で、司会の斎賀秀夫氏が、

大学生にレポートの中で英語のスペリングの誤りを指摘すると、顔赤くしてもじもじするくせに、漢字の間違いを指摘しても「ああそうですか」というようなもんですよ。漢字の間違いを人に指摘されても、はずかしいという感覚が全然ない。通じさえすればいいじゃないかという調子なんですね。

と述べておいでであった。

外国語はスペルを間違えればそれで意味が伝わらなくなる。しかし日本語なら、漢字を一点一画間違えても、或は形だけ似た全く意味の違う漢字と間違えても、相手が何とか推量して理解してくれる。一字二字漢字を間違えたって、それでも意味が通じる、という日本人同志の変な相互理解が、却って正確な文字を書く必要性を感じさせないのかも知れない。

私自身、大学で講義をするようになって十三年目である。御多分にもれずレポートや筆記試験の採点の時、その内容、文章全体について評価する前に、個々の文そのもの、書かれた漢字等につき、そのまま目をつむって見過ごしていいのかと迷うのが常である。

大学生の日本語の力、文字力の問題に関しての対処し方は種々あろう。大学生がその程度の文字力しかないのは、これは大学教育の場でどうこう言うべき問題ではない。大学以前の学校教育の負うべき事であり、今更どうにもならない、とするのも一つであろう。しかしながら、大多数の学生は本学を卒業すればこれ以上学校教育を受ける事はなく、であればこそ、出来る限り文章力、文字力を補ってやりたいとも考えるのである。

卒業以後を考える迄もなく、日本語を正確に読み、書き、話す事が普通程度に出来なければ、在学中どうやってそれぞれの専門教育を受け自分のものにしていけるのであろう。

ともかく、本学学生の現状をその一部なりとも整理していき、この種の問題を考える資料の一つとしたい。猶、本稿ではまず漢字の問題（特に誤字の）に限定してまとめる。

昭和56年度の本学の「文学」の講義で、井原西鶴の『日本永代蔵』を扱った。そして学年末に、この作品や江戸時代の町人、経済等を材料にしてレポートを書かせた。このレポートから学生の漢字使用の一面を見ようとするものである。ただ、作品や題目等の関係から、レポ

ートで使用される漢字には偏りが出るであろうし、漢字全般にわたる考察の資料とはし難い。

又、同じ56年度には経営学部の「文章指導」を担当した。しかしこの方は、学生が文章の練習をする目的をもって受講して居り、文章の問題、漢字使用の問題共、他と同一に扱かわない方がよいであろう。それらと違って、通常の講義のレポートの場合は、各々の学生の漢字能力や使用態度が比較的普通に表われると考えるので。

以下、考察の対象とするレポートは、学年末に提出されたものの中から、二回生を中心にして、経営学部93名、工学部土木工学科59名、同交通機械工学科43名のものである。使用枚数はレポート用紙2〜5枚の範囲。

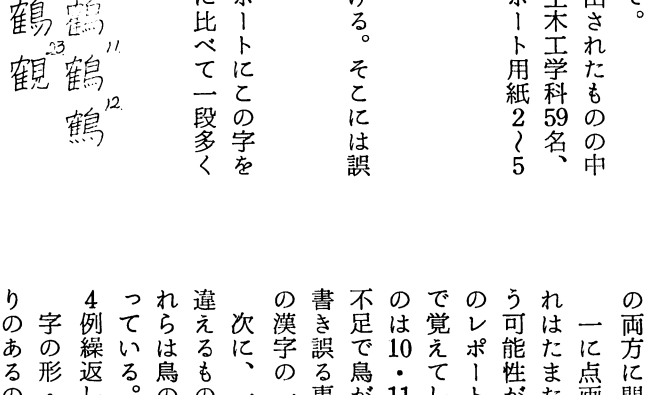
二、異形例の多い漢字　及び偏の誤り

まず、同一漢字で異形例の多いものをいくつかあげる。そこには誤字の問題点のかなりのものが集中して見られる。

イ、鶴

作者名が井原西鶴である関係上、殆どの学生がレポートにこの字を書いた。そのせいもあって、誤字の種類が他の漢字に比べて一段多く見られた。

イ



この鶴の字は言う迄もなく常用漢字の範囲には入っていない。しかし、偏・旁別個にすれば、

確　鳥　鳴　鶏

などが常用漢字に含まれているから、当然これらの字は習っている筈である。テキストに書かれている鶴の字を見て、もしそれが初めての字であったとしても、漢字の部首を正確に理解していれば書けない字ではない。もっとも、小学校で漢字を習う時に、単に漢字全体の形でしか覚えていない学生も多いのかも知れないが。

ともあれ、この鶴の異形字はレポートを見ていて気がついたものに右の23例あった。偏のみに問題あるもの、旁のみに問題あるもの、その両方に問題あるもの、などである。

一に点画に不足ある例。偏に誤りのあるのが9・21などである。これはたまたまレポートでその字を書いた時だけの書き誤りであるという可能性がないではない。しかし、9・21共にそれぞれの学生が自分のレポートでその形を二度繰返して書いている。という事は、その形で覚えてしまっている、と判断してよいわけである。旁に誤りのあるのは10・11・21などで、10は5人に見られた。21の例は、横棒一本の不足で鳥が烏になってしまう。鳥の字だけを書く場合は、これを烏と書き誤る事はなさそうである。ところがこの烏と烏の例に限らず、他の漢字の一部として使われる場合、より不注意となる事が多い。

次に、一見画数の不足はないようでも、字の一部を別の字のと取り違えるもの。旁に誤りある例に3・4・5・9・19その他がある。これらは鳥の上部を自としている。3は17人、4は2人、5は4人が使っている。22は鳥の下部を片仮名のツとしている。同一学生がこれを4例繰返して居り、又為の字の下部も同様ツを書いている。

字の形・構成の一まとまりのものを二つに分けてしまう例。旁に誤りのあるのが6・8・16などである。鳥の字を上部と下部とに切り離してしまっている。6は3人に見られた。偏に誤りのある例の、14〜18はウ冠と隹とに分けてしまっている。14は4人に見られた。19は隹を二部に分けている。この学生は八頁への2の如く、権の字も同様の形で書いている。

点画の釣り合いを破っている例が12・13である。

23は観の字と混乱してしまっている。この形を書いた学生は5人。その内の一人は、西鶴と書くべき所にこれを5例繰返しており、もう一人は2例書いている。

1・4・5・7・11その他、隹の筆順が不正確で誤字となっている。この類はかなり見られ、1は7人が書いている。

隹の部分の筆順を誤る例は他の字にも多くある。後の一覧に個別に掲げるが、

集14人・確7・誰7・観6・稚5・雅4・権4・進3・維2・難2・難2・唯1

などが見られる。特に雅の字は、何れも学生各自の名前である。これに限らず、自分の姓名であっても正確に書かない学生をかなり見うける。

ロ、蔵

扱った作品名が『日本永代蔵』であったので、蔵の字も殆どの学生が書いた。そして、レポートに見られた異形字は次の通りである。

ロ 蔵[1] 蔵[2] 蔵[3] 蔵[4] 蔵[5] 蔵[6] 蔵[7] 蔵[8] 蔵[9] 蔵[10]

点画の不足する例に、臣の部分の一画を落とす3。これは1人だけであるが、4の如く臣を巨と誤るのは16人。7の類のたすきの欠落は他の字にも見られる。雁垂を欠く2の類は1人であるが、この学生は蔵と書くべき所を全て2の形で書いていた。

筆順を違え、止めるべき所を貫いてしまったのが1である。この形で書いたのは10人。その中の1人は拒も同様の形で書いている。

点画の余分なものに8の類が見られる。これは雁垂を病垂の如くに誤っている。鶴の8・14他の如く、一まとまりの部分を分けてしまっているのが5の例である。

6の例は点画の釣り合いを破って、別の字形となっている。10は臓と混乱するものであり、9は更に臓の字から2の如く雁垂の部分を落としている。

ハ、身

ハ 身[1] 身[2] 身[3] 身[4] 身[5] 身[6] 身[7] 身[8] 身[9]

この字の場合、6・8・9の如く一画少い例のほかは、些細な取るに足らぬ字形であるかも知れない。が、これらを身の字であると認めるにはためらわざるを得ない。特に、3の形は16人が書いている。

ニ、義　ホ、段　へ、描　ト、得

ニ 義[1] 義[2] 義[3] 義[4] 義[5] 義[6] 義[7]

ホ 段[1] 段[2] 段[3] 段[4] 段[5] 段[6] 段[7]

へ 描[1] 描[2] 描[3] 描[4] 描[5] 猫[6] 猫

ト 得[1] 得[2] 得[3] 得[4] 得[5] 得[6]

これらの字の場合も以上とほぼ同様である。点画の不足するものに、ニの3・4、ホの6・7、トの1などがあり、トの1は6人に見られる。点画の余分なものにへの4など。点画が余分で、別の形の字と誤るものに、ニの7、トの2～6があり、トの2は4人、トの4は2人例がある。

偏を他の字のものと誤るのがトの5の如く行人偏を人偏とするもの、への5・6の如く手偏を獣偏と誤り猫の異形とするものなど。

とめるべきを貫く例にホの3、への1ほかがあり、への1は5人見られる。後述の如く、田と書くべき所を貫いて由と書き誤る事はまずあり得ないはずだが。貫くべきをとめる例に、ニの2・ホの1・2・4ほかがある。

ほかにはへの2の如く点画の釣り合いを破る例もある。ニの5などはやっかいな誤字であるが、この学生は何回もこの形の字を繰返していた。

チ、衣偏　リ、獣偏　ヌ、三水

以上の同一漢字に見られる異形ではなく、偏の誤りの多いのを三種例にあげる。

チ　初[1] 袖[2] 裕[3] 袂[4] 補[5]

リ　拘[1] 狂[2] 獲[3] 独[4] 狂[5] 狂[6] 狂[7] 独[8]

ヌ　浪[1] 渡[2] 沢[3] 瀬[4] 淀[5] 河[6] 渡[7] 浪[8]

チの類の衣偏を示偏に誤る例は他でも多く見られる。1は19人、2は3人、3は3人。

リの1〜3は、獣偏を正確に書かないか、或は手偏と混同する例である。4〜8は獣偏を書く意志はあるようだが、釣り合いを破ったり、デザイン化したりしている。猶、7・8は同一学生の字である。

ヌの三水の形は、この程度なら見許してもよいとする意見があるかも知れないが。

ル、貫く　とめる

前述の例にもあったし、又後にも再度触れるが、貫くべきをとめ、とめるべきを貫く例に、失うを矢うと書き、初午を初牛と書いた学生が居る。これなど、誰しもが誤りであると認めるだろうし、全く違う形の字である事は言う迄もない。

所が、後述の解の字の牛の部分を午とする学生の例は多くあっても、これを誤字であると自覚する者は殆どない。点画に過不足があろうとも、貫く、とめるの誤りがあろうとも、その異形での字が他になければそのまま正しい字と同様に通用させてしまう。

学生に話す時によく引合に出すのが、

田　由　甲　申

である。貫くか否かによって全く違う字に変ってしまう、という事も斯様に単純な例ならば学生も納得するのであるが。大学に程近い食堂で某日昼のサービス品として、店の前に「午丼〇〇円」と大書してあった。店主も客もこれを「ギュードン」と読んでいる事は疑いもない事であるが。

さて、本稿で漢字の様々な書き誤りを取り上げているが、決して単に漢字が正字体に比べて違っているという事だけを問題にするつもりはない。漢字などどう書いても適当に似た形であれば、一点一画程度過不足があろうと、突き抜けようがとめようが、何とか意味が通じるであろうとする書き手の意識。少々違いがあっても、否かなり点画・形の相違があっても、大体この字であろうと推量して理解してしまう読み手の不可思議な善意。これが両々相俟って、単に漢字をよい加減に書くだけにとどまらず、言葉を自分勝手に使い、文にもならぬ文を書いていく事につながっていると思うからである。

外国語教育は大学でも必修科目であり、学生も又外国語の一字一点の違い、文法の誤り等々に出来るだけ正確を期そうとしているらしい。それなのに、外国語を学び、専門教育を受ける大本となる日本語には何故斯くも不正確なままで居れるのであろうか。

何れ稿を改めて、学生の文章表現の問題を扱うつもりで居る。今回はまず、漢字の問題ありと思われる異形の具体例を整理する事に重点を置く。これを如何にして学生の文字力を向上させるか、という事になると私如きに良案のあろうはずもない。

がしかし、以前沖縄国際大学で国文学科の学生に数年間文章指導をし、本学で二年間経営学部の学生の文章指導を担当した、そのわずかの経験からは、極く当り前の方法を思いつくだけである。学生に出来るだけ多くの文章を書かせ、添削して返し、それをもとに訂正させる。その時に漢字の誤り等も繰返し指摘する事により、かなりの学生の漢字を是正出来た。但し、一年間に十数回同じ漢字の誤りを注意し続けても効果のない学生も皆無ではない。最終的には本人の意志如何であるかも知れない。

以下、レポートに見られた誤字・宛て字の具体例を適宜類別して例示する。

三、誤字の1—宛て字

音・意味等を誤用する宛て字の類を本項に列挙する。通用の字形を熟語のままあげ、その下に学生の使った宛て字を示す。以下同じ。

イ、単に同音の字を宛てる例

意外—以外　興味—驚味
一攫千金—一画　軽蔑—軽別
一篇の小説—一辺　結局—結極
影響—影境　考察—孝察
良心の呵責—仮借　幸福—幸副
関心—感心　西鶴—西確
無関心—無感心　自身—自心
喜怒哀楽—喜努　地道—自道
情勢—情政　奉公—奉行
政策—制策　方針—方身
絶対—絶体(2)　夢中—無中
大して—対して　命題—名題
大切な—大接な　好きな様に—用に
徹する—哲する　要因—要員
並大抵—並大体　利息—利足
不信—不振

ロ、音が通ずる字で、部首に共通する部分のある字を宛てる例

偏又は旁等を取り違える例

不要な偏を加える例

意識—意織　専門—専問
犠牲—儀性(5)　大胆不敵—大担不摘
原因—源因　蓄財—畜財
倹約—険約　知識—知職
元禄—元録(3)　抵当—低当
元禄(2)　徹底—撤抵
講義—講議　到底—倒底
虎視眈眈—耽耽　動揺—動謡
詐欺—詐期(2)　莫大—漠大
自慢—自満　描写—猫写
徐々—除々　不思議—不思義
成功—成巧(3)　放漫—放慢
煎茶—前茶　明晰—明析

ハ、音が通ずる字で、意味の似通い・取違え・混乱、他の熟語との

錯覚等により宛てる例

隠居―陰居　　創作―想作
希望―気望　　同然―同前
豪邸―豪庭　　日常茶飯事―日常茶飯時
混乱―困乱　　反映―繁栄
商売―商買　　悲喜劇―非喜劇(5)

ニ、訓が通ずる字で、単に同訓のものを宛てる例、意味の似通い・取違えにより宛てる例

浮彫り―浮刻り　　身に付ける―見に
金を返す―帰す　　尤も―最も
金を借りる―仮りる　　安らぐ―休らぐ
初めて―始めて(3)　　詫―侘
始める―初める(4)

ホ、その他

大きく―多きく　　示す―指めす
面白い―おも知ろい　　説く―問く
金持―金物　　値段―価段
大金持―大金物　　齎す―持たらす
考える―感んがえる　　持って―以て
呉れる―下れる　　―物って
言葉―語葉

以上の宛て字で複数の使用者のある例は()にその数を記す。以下同じ。

ホの、金物・大金物・物って、の宛て字は別々の学生の使用例である。

四、誤字の2―現存する字体を他に誤用するもの

本項にまとめるのは、書かれた漢字は通用の字体であるが、色々な原因によって全く別個の音訓・意味の字に誤用されたものである。又、四以下の各項に掲げる用例はその一部であり、全用例を示すものではない。

イ、漢字の一部を他の字のものと取り違える例

決済―沢済　　金持ち―金特ち(2)
綱吉―網吉　　心構え―心講え
恐慌―恐怖　　仕出し―任出し
拾う―捨う(3)　　借金―措金
船着場―般着場　　先祖―先視
出船―出般　　丁稚―丁維』
託宣―詫宣　　貨幣―貸幣
―話宣　　質素―資素
致富―到富(4)　　貪欲―貧欲』
倒産―倒産　　男―思
木綿―木線』　　堂々―常々

ロ、漢字の一部が欠落する例

似る―以る　　貧乏―貧之(5)』
金儲け―金諸け　　態勢―能勢
溜る―留る』　　拒否―拒不
蓄え―畜え

ハ、漢字の一部を余分に加える例

至上―致上　　皆―階』
背景―背影(5)　　楽々―薬々』

乞食—迄食　　才能—才態

ニ、意味の似寄りからする誤推定の例

現在—現存　　存続—在続(2)『

始める—発める　　借りる—貸りる(2)

少し—小し(2)　　貸す—借す(7)

ホ、その他

究極—突極　　繁栄—盛栄

辛抱—幸抱　　富裕—富欲

即ち—故ち　　益々—層々

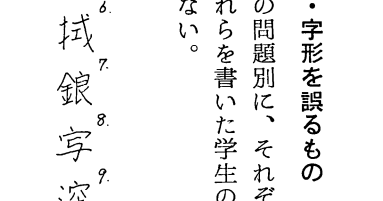
専念—精念　　竜宮—竜官

述べる—求べる

五、誤字の3—字画・字形を誤るもの

本項には、二で述べた誤字の問題別に、それぞれの例を掲げる。イ以下、試みに類別するが、これらを書いた学生の側からすれば、全く別の原因によるものかも知れない。

イ、点画の余分な例

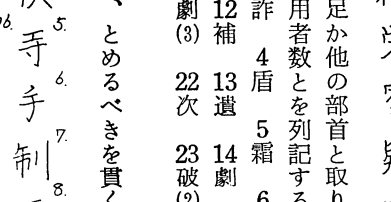


1は縦線、2〜5は横線、6はたすき、7〜11は点がそれぞれ余分である。12〜16は、草冠・三水・之繞等の余分な部首を加えている。右の類の説明は煩雑に過ぎるので、原則として以下省略する。猶、5は横線一画余分と見て本項に入れたが、西の部分を亜と誤るものとしてホの項に含めるべきかも知れない。又、8・9も一点余分という事は、ワ冠をウ冠と誤るもので、同じくホの項に分類すべきか。以下、1〜16の正字を列記する。

1拒　2執　3難　4描　5要　6拭　7銀　8写　9深　10神
11励　12獲　13感　14商　15普　16構

複数の使用者のある例は、2—2人・5—2人・7—2人である。15の字を書いた学生はこれを二度繰返している。

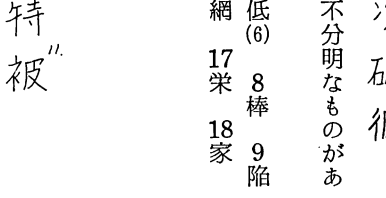
ロ、点画の不足する例



これも又、点画の不足か他の部首と取り違えたか不分明なものがある。同じく、正字と使用者数とを列記する。

1違　2勤(5)　3詐　4盾　5霜　6達(17)　7低(6)　8棒　9陥
10無(2)　11述(2)　12補　13遺　14劇　15初　16網　17栄　18家
19疑　20虚(3)　21劇(3)　22次　23破(2)　24彼(2)

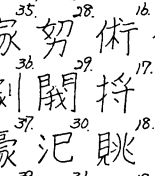
ハ、貫くべきをとめ、とめるべきを貫く例



1解(5)　2恵　3功(3)　4使(31)　5寺　6手　7制(3)　8束
9動　10特　11被　12角　13功　14種　15善　16描(5)

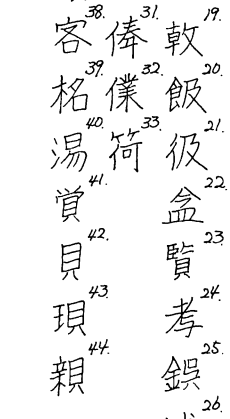
貫いたか否か微妙な書き方のものは右の例数から省いてある。使の誤字が多いのは、便の形との混同があろう。ある学生は使・制を貫かず、一人は束・縛・制を貫かず、又別の学生は使・頓・淒を貫かずに止めている。他に使と事の上部を貫いて書かない学生は、事の字4例共貫いていない。

ニ、繞を途中で止める例



1越　2起　3趣　4題(8)　5勉(2)

ホ、字の一部を他の字のものと誤る例

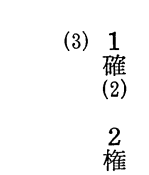


1営　2栄(2)　3学(2)　4覚(3)　5挙　6戦　7単　8覚　9学
10単　11当(4)　12当　13業(5)　14僕
15協　16術　17将　18眺　19敷　20飯　21彼　22盆　23賢　24考
(3) 25錯　26述　27庭　28努(2)　29閥　30氾　31俸　32僕(3)　33荷
34縁　35家(7)　36劇(3)　37豪(2)　38客　39格　40湯　41覚(3)　42見　43現(2)　44親
45鶴　46為　47題　48淀

右の1〜14の類は、誤字であるとめくじら立てる迄もないと言われるかも知れない。しかし、これらも又単に字を書く時の線の方向がずれただけ、というのではなく、形の似た他の字の部首と取り違えているのである。その点、より明確な20飯の服の旁と取り違え、23賢の覧と混乱し、25錯の錯誤と書こうとして誤の字に釣られて錯の旁を取り違える例と同様の誤字であると考える。

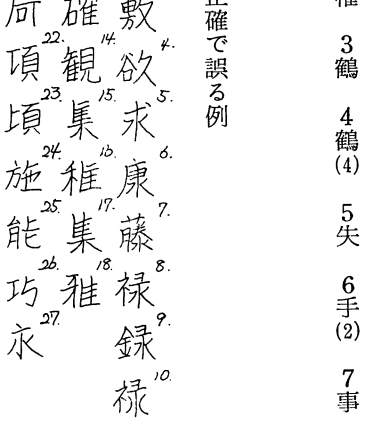
45・46は前述の如く同一学生の字であり、47・48も又別の一人の学生の誤字である。

ヘ、一まとまりの部分を分割する例及びその逆の例



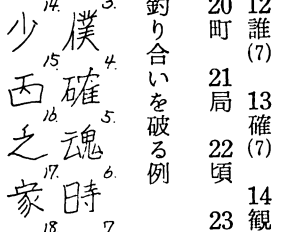
1確(2)　2権　3鶴　4鶴(4)　5失　6手(2)　7事　8商　9商
(3)

ト、筆順が不正確で誤る例



1教 2散 3敷 4欲 5求(3) 6康 7藤(5) 8禄(13) 9録(2) 11集(14) 12誰(7) 13確(7) 14観(6) 15集 16稚 17集(3) 18雅 19何(3) 20町 21局 22頃 23頃(2) 24施 25能 26巧 27永

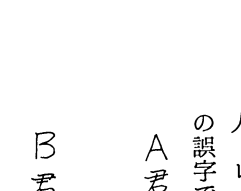
チ、点画の釣り合いを破る例



1儀 2俵 3僕 4確(2) 5魂 6時 7順 8唯 9性 10対(3) 11病 12次 13善 14少 15西 16乏 17家 18界 19持 20波 21婆 22彼 23報

右の類も、字の一部が極端に長いとか短いとかいうだけの事であって、誤字と決め付ける必要はないかも知れぬ。が、1～3は同一学生の字であり、20～22も又一人の学生の字である。たまたまその時に限って線が長かった、というのではなく、前者は人偏を、後者は皮の字を、極端な形で覚えてしまっているのである。又、9～11の場合は単に釣り合いを破るというだけではなく、一見9は小と生、10は文と寸、11は病垂ではなく二水と麻垂、の組合せの如くである。或は各々そう覚えているのかも知れない。

リ、線の方向・字形等を誤る例



1化 2皆(2) 3階(4) 4能 5比 9縁 7家 8手 9承 10斗 11科(22) 12料

六、おわりに

最後に、学生個個人について見た場合、漢字の使用状況はどうであるのか、何人か例にあげる。文章力・文字力共に、当然の事ながら個人差が甚だしい。良い方の学生はここに取り上げる迄もないが、左の如きがある。

K・I君　誤字宛て字共なし。はねるべき所も正確にはねている。身の字の縦棒をはねてないのが唯一の欠点。ついでながら、レポートの文章表現・内容共非常によかった。

N・O君　滅亡を減亡と書き、低の最後の一画を書き落とす。はねるべき所も大体正確であるが、初・同・用・開の四字のみはねるのを忘れている。同君も文章・内容共非常によかった。

Y・K君　借りるを仮りると宛て字。

K・S君　誤字宛て字共なし。はねるべき所も正確。仮名遣いで「いずれ」を「いづれ」と書いたのが唯一の欠点。文章・内容共非常によい。

M・T君　背景を背影と誤る以外は誤字宛て字共なし。但し、はねるべき所をはねない字が何例か見られる。文章・内容はよい。

これらと違って、誤字等の問題の多い学生の例を次にあげる。各人、レポートに書かれた順に例示し、小高の整理を加えていない。何の誤字であるかわかりにくいものだけ括弧に通用の字体を記す。

A君－無感心（無関心）稽達料便頭武

権柳凄身初まる

B君－対して（大して）身覚勉懐努劇

金物（金持）達得描考功的町

常々（堂々）貪しい（貧しい）

C君―蔵 溥 豊 並大体（並大抵） 虚 善 家
鶴 観 緑（縁） 竪 述 展 集
D君―一辺（一篇） 考察（考察） 困乱（混乱）
鶴 鶴 達 得 科 象 題 題 具 皆 解
背影（背景） 功 項 考（考） 展 蔵 蔵
述 承 角 破 幼 源困（原因） 逆 身
E君―蔵 弟 緑 詐 棒 仰 感 細（網） 鶴 橋
語葉（言葉） 特（持） 便 貪（貧）
F君―雅 科 禄 衆 蔵 特（持） 指めす（示す）
裏 考 商（商） 彼（彼） 竜官（竜宮） 題
背影（背景） 適（商） 概 影境（影響）

もし外国語でレポートなり論文なりを書くとして、その中にスペルや単語の誤り等が続出したとすれば、その文章はどういう評価を受けるであろうか。

これ迄に引用した分は重複するが、レポートの採点をしていて気づいた誤字宛て字の類を以下に一覧として掲げ本稿を終る。

排列は五十音順。通用の字体をまず示し、その下に誤字を記す。

使用者数が5人以上の例のみ()に注記する。

（昭和58・1・14）

安―家 家易
為―為 為
違―違
維―維 糾 推 推持
夷―弟
遺―遺
永―永 永
栄―栄 栄
営―営
越―越 起
縁―縁 緑 緑
化―化
何―何 何
河―河
荷―荷
家―家 家 家
家 家

貨―貸 貸幣
科―科(22) 科
雅―雅 雅
界―界
皆―皆 階
階―階 階
解―解 解
慨―概
角―角
覚―覚 覚 賞
格―格
確―確(7) 確 確 確 確
鶴―前引
獲―擭 獲 獲 獲
河―河
学―学 学 学
感―感 感 減
貫―貫

勘―勘
陥―陥
観―観(6)
眼―眼
起―起
寄―寄
喜―喜
機―機
義―前引
儀―儀
疑―疑
犠―犠
客―客
脚―脚
求―求
究―突
宮―官 竜宮
拒―拒
挙―挙

虚―虚
御―御
狂―狂 狂 狂
妊
協―協
教―教 教 教
橋―橋
業―業(5)
局―局
勤―勤(5)
饉―饉
銀―銀
狗―拘
具―具
恵―恵
景―影(5) 背影
頃―頃 項 項
稽―稽
迎―迎

劇—劇 劇 劇
決—決 沢 沢
訣—訣 訳 訳
見—見
堅—堅 監
賢—賢 賢
権—権 権
元—元
現—現
午—牛 初牛
功—功 功 功
巧—巧
高—高
考—考 考 孝
航—航
仰—仰(6) 仰
構—構 構 講
康—康
綱—綱

慌—怖
豪—豪
乞—迄 迄食
魂—魂
詐—詐
座—座(7)
才—才 才
妻—妻
最—最
彩—彩
在—存
財—財 財 財
財
崎—崎
錯—錯
雑—雑
散—散
残—残
支—支

仕—任 任出し
使—使(32)
指—指
始—発
至—致 致上
資—資
施—施
自—自
次—次 次
寺—寺
持—持 持 持
金持ち
時—時
事—事 事
似—以
侍—待
失—失 失 失
質—資
実—実 実

写—写 写
車—車
邪—邪
借—借 措 貸
手—手 手 手
取—取
種—種
趣—趣
舟—舟
拾—捨
袖—袖
衆—衆 衆 衆
衆 衆
集—集(14) 集
執—執
述—述 述 述
迷 述
術—術
盾—盾

純—純
順—順
初—初 初
神—神 神
書—書
少—少 小
承—承 承
称—称
商—商 商 商
適
将—将 将
照—照
象—象
情—情
乗—乗
譲—譲
拭—拭
職—職 職
辛—辛
身—身 前引

進—進 進 進
深—深
神—神 神
振—振
親—親
図—図
誰—誰(7)
数—数
西—西
性—性
制—制
請—請
凄—凄
積—積
節—節 節
銭—銭 銭
旋—旋
専—精 精念
戦—戦

船—般
善—善 善
祖—視 先視
霜—霜
蔵—蔵 前引
束—束
息—息
即—故
存—在 在続
蓄—畜
築—繁
町—町
超—起
眺—眺
泰—泰
貸—借(7)
代—代
題—題(8) 題
顕
託—詫 話
達—達(17)

単—単 単
耽—耽
男—思
段—段 前引
知—知
致—到 到富
稚—稚(5) 維
町—町
鳥—鳥
微—微
低—低(6) 低
底—底 底 底
挺—延
庭—庭
的—的

淀—淀 淀
展—展(9)展
伝—伝
斗—斗
都—都
渡—渡 渡
努—努
当—当 当
倒—倒
湯—湯
等—等
憧—憧
藤—藤(5)藤
動—動
道—道
堂—堂
特—特
得—得 前引
督—督

独—独 独
読—読
頓—頓
貪—貪
那—那 那
難—難 難
能—能 能 態
波—波
破—破 破
派—派
婆—婆
排—拝
背—背
敗—敗 販
売—売
薄—薄 薄
縛—縛
鉢—針 鉾
閥—閥
普—普

氾—氾
飯—飯
繁—盛 繁
番—番 番 番
比—比
否—不 否
彼—彼 彼 彼
被—被
卑—卑
飛—飛
備—備
鼻—鼻
必—心
描—描 前引
病—病
貧—貧(5)貧

敷—敷 敷 敷
武—武 武 武
風—風
腹—腹
複—複
払—払
米—米
袂—袂
変—恋
勉—勉 勉 勉
補—補 補
室—室 通室
俸—俸
豊—豊
報—報
乏—乏 之(5)
芝

僕—僕 僕 僕
盆—盆
益—屑
末—末
無—無 無
滅—滅 滅 滅
綿—線
網—網 網
儲—諸
勿—勿
匁—刃
薬—薬
唯—唯 唯
裕—裕 欲
用—用
幼—幼
要—要
謡—謡
欲—欲

瀬—瀬
楽—楽 薬
濫—濫
裏—裏 裏 裏
律—律
柳—柳
溜—留
料—料
漁—漁
緑—緑
隣—隣
励—励
老—考
浪—浪 浪
禄—禄(13)禄
録—録 録

捷